第３章　市民意識に見る「野宿生活者問題」

Ⅰ 市民による問題の認知

１．「身近な」野宿生活者

１９９５年１０月１８日早朝、大阪市内の中心部（道頓堀の戎橋の上）で、付近で野宿していた６３歳の男性が複数の若い男性（後に二人の青年が容疑者として警察に逮捕された）によって川に投げ込まれて殺害されるという事件が起こった。ほぼ同じころ、同様に大阪では、ＡＰＥＣの開催を間近に控えて、会場となる大阪城公園で野宿する人々の存在が問題化していた。また、東京では新宿駅の地下通路に「ダンボール・ハウス」をつくって野宿している人々（マスコミ報道では一般に「ホームレス」と呼ばれている）の「処遇」を巡って、行政、都民、野宿生活者支援の諸団体等の間でさまざまの軋轢、トラブルが発生していた。これら一連の「事件」や出来事はマスコミでも大きく報道され、以後、いわゆる「ホームレス問題」として「社会問題化」していった。

このような一連の事件を契機とする野宿生活者者の「社会問題化」によって、突如、私たち市民の目の前に野宿生活者の存在とその「問題」性が大きくクローズアップされ始めたのだが、しかし実際には、もうずいぶんと前から、野宿生活者は私たちのすぐそばに存在していたのではないだろうか。たとえば、地下街や公園、高速道路の高架下、商店街の軒下、等々で、私たちはこれまでもほとんど「日常的に」と言ってもいいくらいに、野宿生活者の存在を「見ていた」はずでなのある。その意味では野宿生活者の問題はその「社会的な問題化」の以前に、しかも私たちの「すぐそばに」存在していたのである。まず最初に、このことを（すなわち、野宿生活者という存在が、現在の市民にとってどれほど「身近な」ものであるかということを）市民調査から得られたデータによって確認しておこう。

次の（表１）は今回の市民調査の中での「普段の生活の中で野宿生活者を見かけることがありますか」という質問に対する回答を集計したものである。これを見ると、回答者の６５％が「普段の生活の中で野宿生活者を見かけること」が「よくある」と答えており、「あまりない」「まったくない」と答えた回答者の比率は５％強にすぎない。さらに、次の（表２）は、前問で野宿生活者を「見かける」と答えた回答者に対して、それでは「どういった場所で野宿生活者を見かけますか」と聞いた質問（複数選択）への回答を集計したものである。

（表１）

選択肢	人数	比率（母数は2180）
a．よくある	1432人	65.70%
b．ときどきある	626人	28.70%
c．あまりない	103人	4.70%
d．全くない	19人	0.90%

（表２）

選択肢	人数	比率（母数は2144）
a．家の近所	1284人	59.90%
b．通学通勤途上	380人	17.70%
c．勤務先や通学先の近く	277人	12.90%
d．繁華街	1035人	48.30%
e．その他	714人	33.30%

これを見ると、回答者の６０％は「家の近所」で見かけると答えている。「繁

華街」で見かけると答えた回答者の比率も５０％に近い。すなわち、多くの市民にとって野宿生活者は彼等の日常的な生活空間の中に共存している、あるいは、両者はその生活空間を共有して存在している、と言うことができるのである。次に、（表３）は「普段の生活の中で野宿生活者を見かけることがありますか」という質問に対する回答と「大阪では、野宿して生活している人はここ数年増えていると思いますか」という質問に対する回答のクロス集計表であるが、これを見ると、「見かける」程度が大きい回答者ほど、野宿生活者が「ここ数年増えている」と答える比率が高くなっており、このことから判断するならば、市民と野宿生活者の「物理的な接近」は、おそらく、とりわけここ数年のあいだに顕著になってきた現実であると考えられるのである。

（表３）

度数 列％	見かけることがよくある	ときどきある	あまりない	まったくない	行合計
野宿生活者は増えている	916 64.24	248 39.68	35 35	3 15.79	1202
減っている	30 2.1	36 5.76	5 5	0 0	71
変わらない	309 21.67	171 27.36	16 16	2 10.53	498
わからない	171 11.99	170 27.2	44 44	14 73.68	399
列合計	1426	625	100	19	2170

しかし、市民と、このように「身近な」存在となった野宿生活者との間に何らかの具体的な接触や交渉といったものが存在するのかといえば、そうではない。確かに、市民と野宿生活者との間の物理的な距離は小さくなっている。しかし、この物理的距離の縮小に相応して両者の間の社会的な相互行為の密度が増大しているわけではないのである。

以下の（表４）は野宿生活者を「見かけることがある」と答えた回答者（２１１６人）に対して、野宿生活者を見かけたとき、「野宿生活者とどのようなことがありましたか」と尋ねた質問（複数選択）への回答を集計したものである。最も多い「接触」あるいは「交渉」の形態は「会話をした」であるが、それでさえもわずかに全体の１０％にすぎず、大部分の回答者（８４．４％）は「なにもしなかった」と答えている。

（表４）
「そのときに、野宿生活者とどのようなことがありましたか。
あてはまるものすべてに◯をつけてください」

接触の内容	人数	比率（母数は2116）
a．会話をした	216人	10.20%
b．文句を言った	50人	2.40%
c．いざこざが起こった	44人	2.10%
d．食料や衣類・段ボールなどを提供した	203人	9.60%
e．なにもしなかった	1786人	84.40%

野宿生活者は確かに、物理的には市民の「すぐそばに」存在している。しかし、日常的な相互行為の対象としてはほとんど無に等しいのであり、この意味ではきわめて「遠い」存在でもある。

2．野宿生活者に対する市民の「まなざし」

市民は、彼らの日常的な生活空間のまっただ中（たとえば自宅の近辺や繁華街）に、無視できない数で姿をあらわし始めた野宿生活者を、彼らとの接触あるいは出会いの初めの段階で、どのような存在として知覚したのであろうか。すなわち、市民のどのような「まなざし」のうちに野宿生活者は出現するのであろうか。次の（表５）は「地下街などで野宿している人を見かけた時、あなたはどのような気がしますか」（複数選択）という質問に対する回答を集計したものである。最も多い回答は「いやな気持ちにになる」（44.1%）。さらに、「何かしてあげたいと思うが、自分にはどうしようもないと思う」（38.9%）、「つい目をそらして、見ないふりをする」（36.0%）、「かわいそうだなと思う」（32.6%）、「行政は一体何をしているのかと、怒りを覚える」（30.5%）と続く。これら項目の選択者数はいずれも３０％を越えており、その意味では、住民の野宿生活者に対する反応のかなり一般的な形態であると言うことができるであろう。

（表５）

選択肢	人数	比率（母数は2087）
a．いやな気持ちになる	920人	44.10%
b．かわいそうだなと思う	680人	32.60%
c．行政は一体何をしているのかと、怒りを覚覚える	637人	30.50%
d．何かしてあげたいと思うが、自分にはどうしようもないと思う	811人	38.90%
e．つい目をそらして、見ないふりをする	751人	36.00%
f．まったく気にならない	132人	6.30%

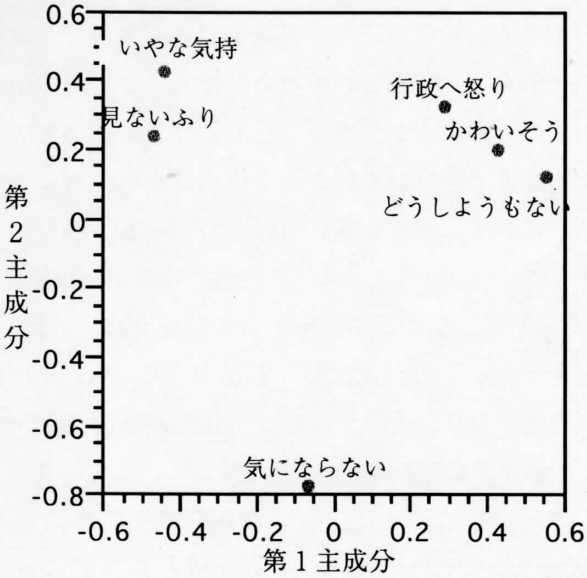
これらの反応の内実をもう少し具体的に分析するために、６個の反応項目に対する回答を変数として主成分分析を行った。その結果をまとめたものが（表６）と（図１）および（図２）である。固有値１以上の主成分は３個抽出され、それらの累積寄与率は６４．７％である。以下、これらの主成分が元データの何を表現しているのか、順を追って解釈していこう。その際、各主成分ごとに算出される各変数（項目）のスコア（主成分負荷量）の値を読み取ることが解釈のポイントになる（注目すべきスコアには下線をほどこした）。

第１主成分（図１のX軸の値を参照）においては「d.何かしてあげたいと思うが、自分にはどうしようもないと思う」（0.53）、「b.かわいそうだなと思う」（0.4）、「c.行政は一体何をしているのかと、怒りを覚える」（0.31）という３項目の主成分負荷量が大きく、それに対して「e.つい目をそらして、見ないふりをする」（-0.52）、「a.いやな気持ちになる」（-0.44）という項目のそれ

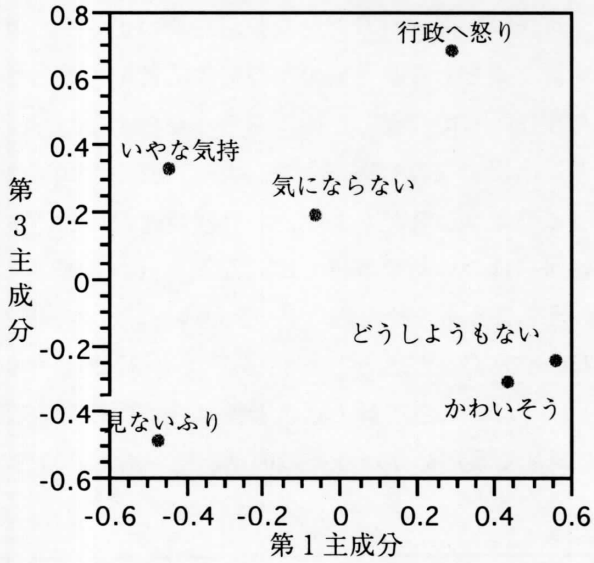
（表６）

固有値	1.5762	1.2705	1.0331
比率	26.2706	21.1747	17.2187
累積比率	26.2706	47.4453	64.664
各変数の主成分負荷量			
a．いやな気持ちになる	-0.44372	0.42354	0.32741
b．かわいそうだなと思う	0.43023	0.19788	-0.30605
c．行政は一体何をしているのかと、、怒りを覚える	0.28909	0.32228	0.68133
d．何かしてあげたいと思うが、自分にはどうしようもないと思う	0.55597	0.12518	-0.24468
e．つい目をそらして、見ないふりをする	-0.46981	0.24021	-0.48772
f．まったく気にならない	-0.06803	-0.77732	0.19285

（図１）
第１主成分と第２主成分の主成分負荷量のプロット



（図２）
第１主成分と第３主成分の主成分負荷量のプロット



が低くなっている。ここから、この第一主成分は野宿生活者に対する市民の「同情」と「嫌悪・忌避」の対比を示していると解釈できる。

第２主成分（図１のY軸の値を参照）では、「ｆ．まったく気にならない」とそれ以外の項目が分離されており、それゆえ、この主成分は野宿生活者の存在に対する市民の関心の有無（あるいは「問題性」認知の有無）を表わしていると言える。

第３主成分（図２のY軸の値を参照）において、スコアの大きい項目は「ｃ．行政は一体何をしているのかと、怒りを覚える」と「ａ．いやな気持ちになる」で、逆に小さい項目は「ｅ．つい目をそらして、見ないふりをする」、「ｂ．かわいそうだなと思う」、「ｄ．何かしてあげたいと思うが、自分にはどうしようもないと思う」である。少しわかりにくい主成分だが、「ｃ．行政は一体何をしているのかと、怒りを覚える」という反応と「ｅ．つい目をそらして、見ないふりをする」という反応の対比に注目すれば、それは野宿生活者の存在という現実に対する「問題解決」志向の有無、あるいは「社会問題化→解決」志向の有無、を示していると解釈できるのではないか。

以上のような主成分の解釈が妥当であるとすれば、そこから私たちは、市民がさまざまな日常生活の場で野宿生活者と出会う際の、その「まなざし」の基本的なありようとして「同情」、「嫌悪・忌避」、「無関心」、「社会問題化（行政への問題解決の要請）」という基本的な４類型を導き出すことができるであろう。

Ⅱ 市民のいだく野宿生活者の「イメージ」

1．野宿生活者イメージの６類型

市民にとって、そもそも野宿生活者という存在は、その知覚の基底において、どのようなものとして「見えている」のであろうか。あるいは受け入れられているのであろうか。確かに、大部分の市民にとって、その存在はもはや「見慣れた」ものであるとしても、この「豊かな」社会と見える現在の私たちの社会において、野宿生活者という存在とその生活の諸形態は、やはり、何ほどかの「異和」の感情を、あるいは「認知的不協和」という混乱を、私たちの内部に引き起こすのではないか。先に見た「いやな気持ち」や「見ないふり」といった、出会いの際の反応もこの不協和と無関係ではないだろう。野宿生活者という存在は現代の都市社会においてそれほど「消化」しやすい現実ではないと思われる。

表面的には、野宿生活者は「無視」というかたちでではあれ、おおむね現在の都市社会の内部に「受け入れられ」、そして、市民となんとか折り合っているかのように見える。しかし、こうした「平和共存」が見せかけであり、その背後には野宿生活者に対する市民の根深い敵意が潜んでいるに相違ない、と推測させるような事件もまた後をたたない。戎橋の「事件」はそうした敵意の存在を一瞬かいま見させる事件であったとも言える。

ここでは、こうした共存の背後に存在すると思われる、市民の野宿生活者に対する敵意と蔑視の実態を、今回の市民調査から得られたデータに即して明らかにすることを試みてみたい。ここで考察の素材として用いるデータは、回答者に、野宿生活者についての２１個のイメージ項目を提示して、「野宿している人たちに対して、あなたはどのようなイメージをお持ちですか」とたずねた質問（複数選択可）に対する回答である。まず最初に、その単純集計の結果を示しておく（表７）。

回答者によるこれら２１個のイメージ項目の選択パターンのうちには、市民が野宿生活者という

（表７）
「野宿している人たちに対して、あなたはどのようなイメージをお持ちですか。
あてはまるものすべてに○をつけてください」

イメージ項目	選択者数	比率
a．孤独	1438人	66.0%
b．楽しそう	109人	5.0%
c．苦労してきた	308人	14.1%
d．かわいそう	706人	32.4%
e．こわい	430人	19.7%
f．怠け者	1055人	48.4%
g．みじめ	862人	39.6%
h．気楽	594人	27.2%
i．自由	592人	27.2%
j．しんどそう	255人	11.7%
k．汚い	1445人	66.3%

イメージ項目	選択者数	比率
l．乱暴	157人	7.2%
m．変わり者	836人	38.4%
n．すねている	277人	12.7%
o．酔っぱらい	686人	31.5%
p．不健康	1098人	50.4%
q．無気力	1172人	53.8%
r．うっとうしい	344人	15.8%
s．じゃま	187人	8.7%
t．人がいい	123人	5.6%
u．影が薄い	219人	10.1%

存在に関して形成しているイメージ空間のありようが表現されているはずである。そこで、このデータからそのイメージ空間の基本的なかたちを読み取ってみよう。方法としてはここでも、主成分分析による「次元縮小」によって、これらのイメージ項目の選択パターンを「要約」するような少数

の「成分」を探すという手続きを用いる。そのさい、２１個のイメージ項目のうち、他のイメージ項目との相関が小さい４個のイメージ項目（「楽しそう」、「変わり者」、「人がいい」、「影が薄い」）はこの分析からは除外する。

まず最初に、１７の選択肢を変数として主成分分析を行った結果が、（表８）である。データが「選択」「非選択」という２値のカテゴリカルなデータであるということと、そしておそらくは、回答者の選択パターンのばらつきがかなり大きいために、各固有値はあまり大きくなっていない。それゆえ、固有値が１以上の主成分は６個抽出されてはいるが、各主成分の寄与率はさほど大きくなく、それら６主成分による累積寄与率も５３％とかなり小さくなっている。しかし、この６個の主成分によっても、回答者のイメージ項目の選択パターンの基本的なかたちはうかがえる。（表８）には１７個のイメージ項目の各主成分ごとの負荷量（これの負荷量は、ここでは解釈を容易にするために「回転」を施して得られたものを表示している）も示されているが、ここから各主成分においてどのイメージ項目のスコアが大きくなっているか（もしくは小さくなっているか）を読むことによって、その主成分が何を表わしているかがおおよそ明らかになる。以下、簡単に要約しておこう。

（表9）

	第１主成分	第２主成分	第３主成分	第４主成分	第５主成分	第６主成分
固有値	2.491	1.758	1.447	1.242	1.108	1.047
寄与率	14.65	10.341	8.511	7.303	6.518	6.158
累積寄与率	14.65	24.991	33.502	40.805	47.323	53.481
孤独	0.247	0.501	0.003	-0.071	-0.303	0.122
苦労してきた	-0.075	0.683	0.133	0.033	0.001	-0.080
かわいそう	-0.104	0.568	-0.173	-0.045	-0.070	0.279
こわい	-0.159	0.056	-0.076	0.663	0.109	0.211
怠け者	0.636	-0.262	0.024	0.156	0.133	0.147
みじめ	0.309	0.259	-0.256	-0.071	0.229	0.412
気楽	0.080	-0.051	0.800	0.018	0.024	0.052
自由	0.039	0.045	0.799	-0.035	0.025	0.003
しんどそう	0.011	0.634	-0.037	0.121	0.184	0.013
汚い	0.050	-0.095	0.092	0.189	0.180	0.705
乱暴	0.200	0.067	-0.033	0.714	0.088	-0.132
すねている	0.583	0.198	0.139	0.206	0.108	-0.241
酔っぱらい	0.099	-0.039	0.082	0.651	0.014	0.186
不健康	0.093	0.169	0.028	0.093	-0.015	0.612
無気力	0.691	0.002	0.040	-0.077	0.013	0.221
うっとうしい	0.084	-0.027	0.005	0.052	0.795	0.177
じゃま	0.114	0.044	0.048	0.126	0.797	0.014

第１主成分　「ｆ．怠け者」「ｑ．無気力」「ｎ．すねている」の項目が大きい値を示しており、市民が野宿生活者に対して抱いている「怠惰」イメージを表わしていると考えられる。

第２主成分　「ｃ．苦労してきた」「ｊ．しんどそう」「ｄ．かわいそう」「ａ．孤独」という項目が大きい値を示している。野宿生活者への「同情」や「共感的理解」を喚起するようなイメージである。「同情」イメージと名付けよう。

第３主成分　「ｈ．気楽」「ｉ．自由」という項目のスコアが大きい。世間のしがらみや対人関係のわずらわしさ、社会的義務、ルールなどからまぬがれている（自由な）存

在というイメージ。マスコミ報道においてしばしば見られるイメージであり、また「世捨て人」や「放浪者」に対する「神話的」あるいは「ロマンチック」なイメージとも通底するイメージである。「気楽」イメージと名付けておく。

第4主成分　「乱暴」「こわい」「酔っ払い」といったイメージ項目によって特徴づけられている。「恐怖」イメージである。

第5主成分　「じゃま」「うっとうしい」という項目の値が大きい。「じゃま者」イメージである。

第6主成分　「汚い」「不健康」「みじめ」という項目の値が大きい。その内容は少しわかりにくく、解釈が困難だが、ここではさしあたり「みじめ」イメージと呼んでおく。

以上の6個の主成分は、市民が野宿生活者を認知するさいに動員される、いわばコア・イメージ、あるいは原型とでも言うべきものである。具体的な存在としての野宿生活者は、こうしたコア・イメージを柱として構成されるイメージ空間のなかに取り込まれ、しかるべき位置に定位せしめられることによって、認知され、了解されることとなる。たとえば、ある場合には「かわいそうな」野宿生活者として、また、ある場合には「こわい」野宿生活者、「汚い」野宿生活者、等々といった具合に常に何らかの「形容詞つきで」認知されることになるのである。

もちろん、こうしたイメージに何らかの客観的な根拠といったものがあるわけではない。それどころか、こうしたイメージがまったく不当であることを多くの経験的証拠によって示すことのほうがむしろはるかに容易なくらいである。すなわち、これらのイメージは野宿生活者の具体的な「事実」をさし示しているのでもなければ、市民と野宿生活者の間の具体的な関係のありように規定されて形成されているのでもないのである。なぜなら、先にも指摘したように、回答者の大部分は、野宿生活者の姿を「見る」ことはあっても、具体的な接触や両者の間の相互行為はほとんど皆無なのであり、このことからしてもこれらのイメージが具体的な根拠を欠いたものであることがわかる。野宿生活者に対する市民のイメージのありようを規定している根拠は、それゆえおそらく、イメージされる野宿生活者の側にではなく、イメージする回答者（市民）の側にあるのである。

しかし同時に、このようないわば実体的な裏付けを欠いたイメージを介して、市民は野宿生活者を認知し、その認知に基づいて「現実の問題」としての野宿生活者の存在に対応しようとしているということもまた事実である。簡単に言えば、市民は（あるいは現在の都市社会は）自らが仮想したイメージに基づいて、生身の野宿生活者に対応するのである。

たとえば、次の（表9）は、「先頃、大阪市内で『APEC』が開催された際に、大阪城公園やその周辺で野宿している人達が行政によって立ち退かされるという事態が起こりました。こうした事態についてあなたはどのように思われますか」という質問に対する回答を集計したものであるが、ここでは回答者は野宿生活者の排除という「現実の問題」に対してかなり明確な「判断」を下している。ここで判断停止（「わからない」）した回答者の数は6．5％と多くはない。回答者はこうした判断の根拠をどこから得ているのだろうか。日々、さまざまのメディアによって提供される「情報」

（表9）

選択肢	選択者数	比率（母数は2164）
a．当然だと思う	262人	12.1%
b．やむをえない	1544人	71.3%
c．してはいけなかった	219人	10.1%
d．わからない	139人	6.4%

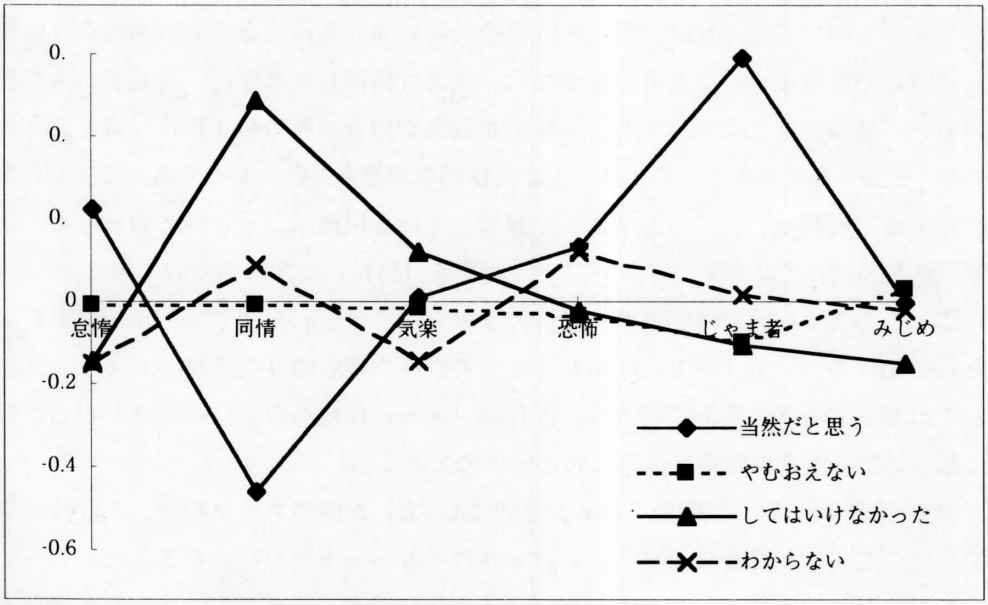
が彼等の判断にかなりの「影響」を及ぼしているだろうということはほぼ確かだと思われるが、しかし、そのようないわば「外からの影響」がすべてではないということもまた確かである。その判断には何ほどか「主体的な」判断、「自前の」判断という契機がともなっているのであり、そしておそらく、この「主体的な判断」をその根底において規定しているのが、彼等が抱く「野宿生活者のイメージ」であると考えられるのである。

そこで、上記の質問に対する回答グループ別に、先のイメージ項目データの主成分分析から得られる回答者個人の主成分得点の平均値を求めてみた。その結果を検定結果とあわせて示したものが（表１０）と（図３）である。これを見ると、確かに、回答者の「野宿生活者問題」に対する判断と彼等が抱く「野宿生活者イメージ」との間にはかなりはっきりとした関連が存在していることが

（表１０）

カテゴリー	第１主成分 怠惰	第２主成分 同情	第３主成分 気楽	第４主成分 恐怖	第５主成分 じゃま者	第６主成分 みじめ
a．当然だと思う	0.223	-0.458	0.015	0.134	0.596	0.001
b．やむおえない	-0.007	-0.005	-0.01	-0.033	-0.095	0.03
c．してはいけなかった	-0.145	0.491	0.125	-0.021	-0.1	-0.15
d．わからない	-0.148	0.089	-0.144	0.123	0.022	-0.021
無回答	0.229	0.432	0.165	0.123	0.427	-0.511
F値	6.995	38.359	2.169	2.86	38.649	2.103
Prob	0.0001	‹ 0.0001	0.0907	0.0357	‹ 0.0001	0.0979

（図3）



うかがえる。行政による野宿生活者の排除を「当然」とする回答者においては、とりわけ野宿生活者に対する「怠惰」イメージと「じゃま者」イメージの平均スコアが大きく、「同情」イメージのそれが小さくなっており、また、そうした行政のやりかたを「不当」とみている回答者の平均値は、それとは正反対の傾向をはっきりと示している（「やむをえない」と答えた回答者の平均値は両者の中間にある）。

以上のように、市民の野宿生活者イメージは、その根拠の薄弱さにもかかわらず、彼等が現実に野宿生活者を「見る」ときや、「野宿生活者問題」について何らかの判断を下す際に動員され、その知覚のありようや判断の方向性を規定しているのである。

2．回答者の基本属性と野宿生活者イメージ

市民が野宿生活者に対して抱いているイメージの基本的な形として「怠惰イメージ」「同情イメージ」「気楽イメージ」「恐怖イメージ」「じゃま者イメージ」「みじめイメージ」の6個を抽出したわけだが、次にここでは、こうしたイメージが回答者の性別、年齢という属性に応じてどのように異なっているか（あるいは異なっていないか）ということも見ておこう。

①「性別」と野宿生活者イメージ

次の（表11）は6個のイメージに対応する回答者の主成分スコアの「性別」平均値を求めたものである。この表から男性と女性では野宿生活者に対するイメージがどのように異なっているかということをうかがうことができる。

（表11）

性別	怠惰	同情	気楽	恐怖	じゃま者	みじめ
男性	-0.09	-0.07	0.05	-0.12	0.07	-0.14
女性	0.11	0.08	-0.05	0.11	-0.06	0.14
F値	8.88	6.76	3.64	23.31	8.67	38.94
Prob›	0.003	0.003	0.057	0.000	0.003	0.000

男性と女性との間で大きく異なっている野宿生活者に関するイメージは、その「恐怖イメージ」と「みじめイメージ」である。この二つのイメージ・スコアは、男性に比べて、女性において顕著に大きくなっている。

②「年齢」と野宿生活者イメージ

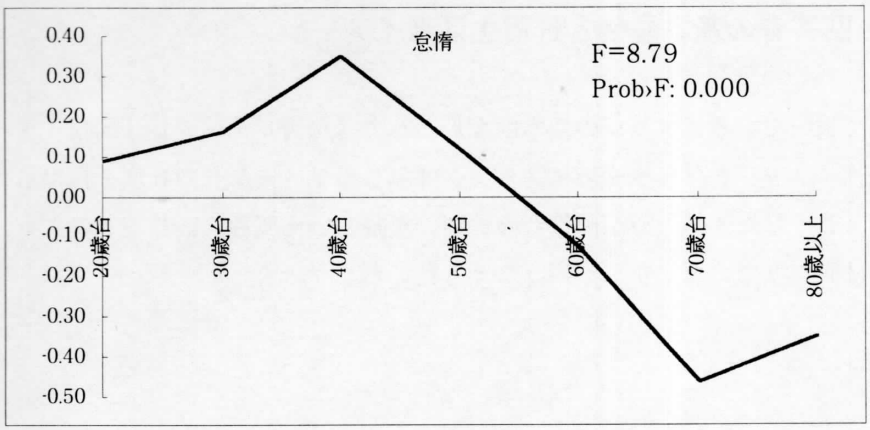
次の（表12）は6個のイメージに対応する回答者の主成分スコアの「年齢」平均値を求めたものである。なお、年齢階層間でそのイメージ・スコアに統計的に有意な（P＜0.05）差が認められる項目については、そのグラフも提示してある。

（表12）

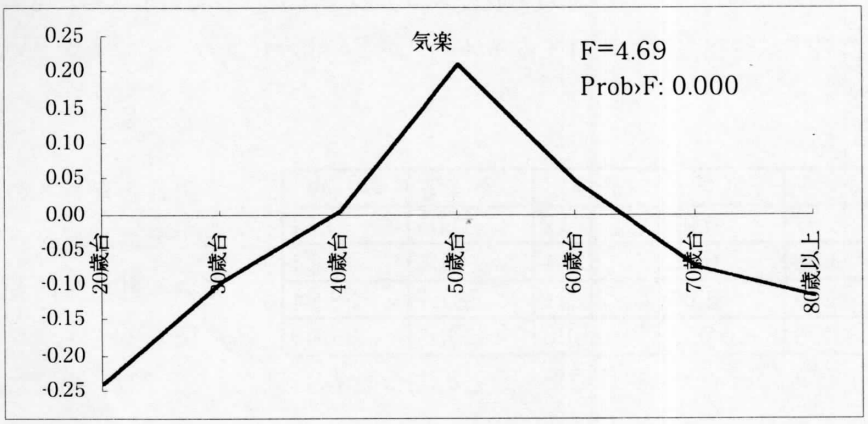
年齢区分	怠惰	同情	気楽	恐怖	じゃま者	みじめ
20歳台	0.09	0.13	-0.24	0.27	0.04	0.26
30歳台	0.16	0.01	-0.10	0.13	0.09	0.19
40歳台	0.35	0.09	0.01	-0.01	0.08	0.08
50歳台	0.12	-0.10	0.21	-0.15	-0.04	0.04
60歳台	-0.13	0.07	0.05	-0.08	-0.07	-0.17
70歳台	-0.46	-0.15	-0.07	-0.04	-0.03	-0.19
80歳以上	-0.34	-0.17	-0.11	0.06	0.09	-0.36
F値	8.79	2.06	4.69	5.03	1.26	10.94
Prob›	0.000	0.064	0.000	0.000	0.270	0.000

「怠惰」イメージ・スコアの平均値は40歳台において最も大きい。いわば、「働き盛り」の年代において野宿生活者を怠け者と見ている人が多いということである。このことはもしかしたら、彼ら自身の生活の「しんどさ」の反映なのかもしれない。「気楽」イメージのスコアが大きいのは50歳台である。「恐怖」イメージは若年層と高齢者において強くなっている。女性においてこの「恐怖」イメージが強かったことと併せて推測すれば、おそらく、野宿生活者に対して

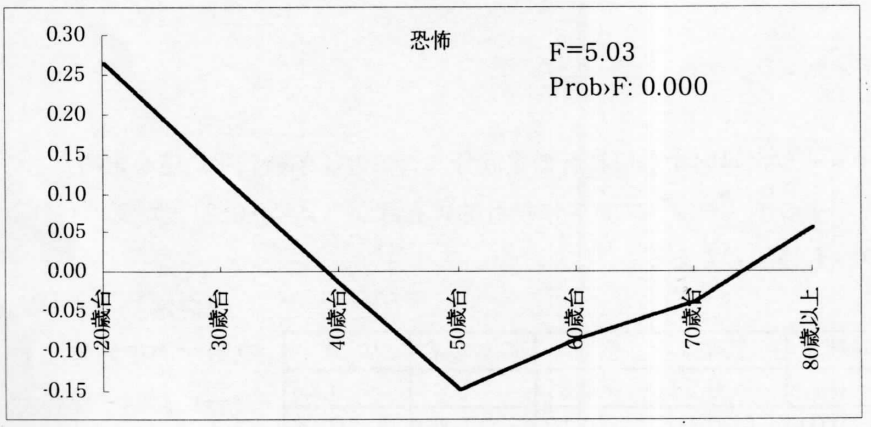
（図4）



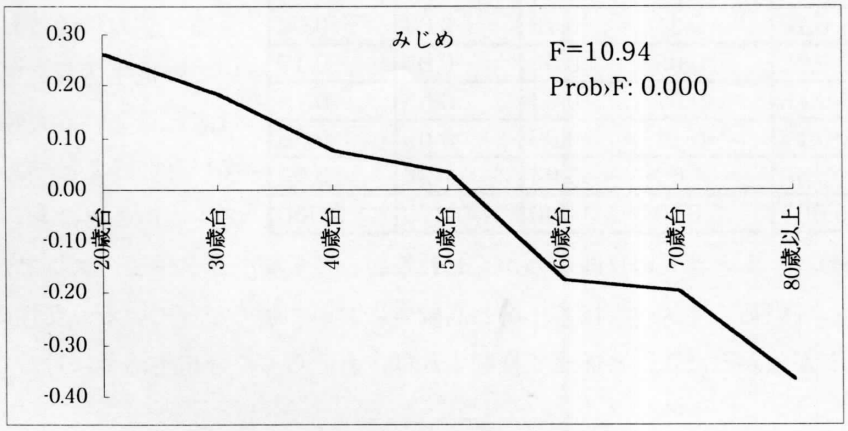
（図5）



（図6）



（図7）



「恐怖」イメージを最も強くいだいているのは「弱い」若年と高齢の女性であると思われる。「みじめ」イメージのスコアは若年層において高く、年齢が上昇するにつれて一直線的に低くなっている。この「みじめ」イメージの中核をなしているのは「汚い」「不健康」というイメージであるが、野宿生活者に対するこうしたイメージが若年層において強いということの背景には、彼ら若い人たちが「清潔」と「健康」に対してきわめて強い執着心を持っているという事情があるのではないだろうか。

3．野宿生活者についてのイメージと「情報源」

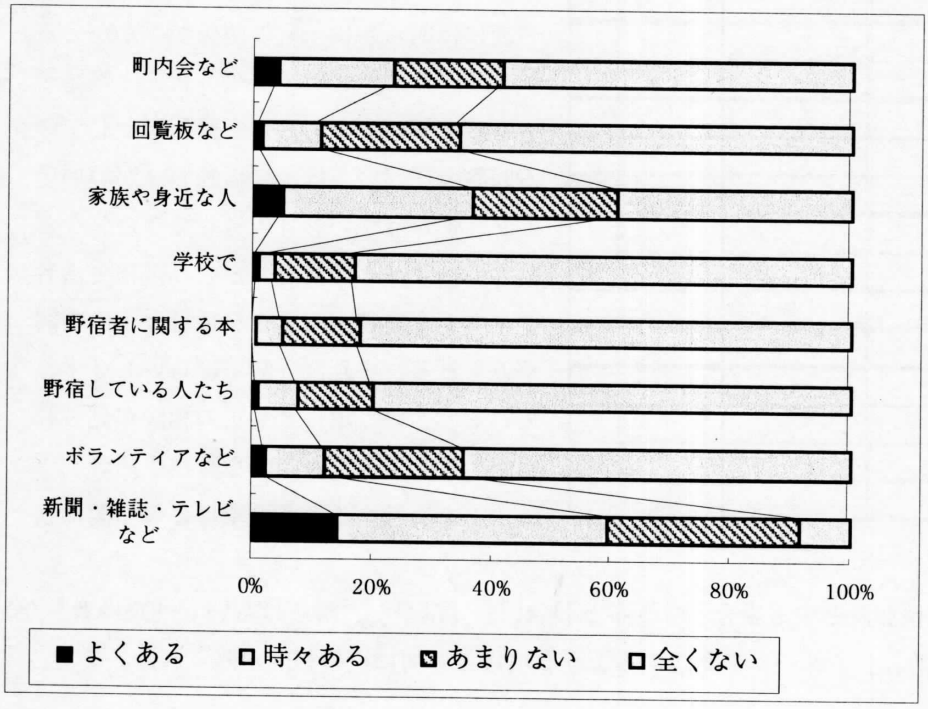
先に確認したように、大多数の市民と野宿生活者との間に相互の社会的な関係や交流がきわめてとぼしい現状において、上で指摘したような、市民の野宿生活者に対するイメージは、どのようにしてつくりあげられるのだろうか。本節では、市民の野宿生活者イメージの形成に大きな影響を及ぼしていると考えられる「野宿生活者に関する情報」源に着目する。

結論的に言えば、情報源の相違に対応して、市民が野宿生活者について抱くイメージにかなり相違が見られる。このことは、それぞれの異なった情報ルートにおいて、野宿生活者に関してかなり異なった情報が流れているのではないかと予想されるのである。

そもそも市民は野宿生活者に関する情報をどのようにして得ているのであろうか。今回の調査では、このことを調べるために「野宿者が実際どのように暮らしているのかについて、あなたは具体的な知識をどこから得ましたか。以下の質問のそれぞれについてお答えください」という質問文と8項目の「情報源」を提示し、それぞれについて「よくある」「時々ある」「あまりない」「全くない」のいずれかを選択してもらった。提示した8項目の「情報源」は以下の通りである。

① 新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどで見聞きする
② ボランティアなど野宿者と関わる仕事をしている人や、野宿者と日頃から親しくしている人から聞く
③ 野宿している人たちから直接話を聞く
④ 野宿者に関する本（雑誌などをのぞく）を読んだ
⑤ 学校で教わった
⑥ 家族や身近な人から話を聞く
⑦ 回覧板や地域の掲示板などで知る
⑧ 町内会などの話し合いで聞く

(図8)



次の（図8）はこの質問に対する回答の単純集計結果を図示したものである。

これを見ると、野宿生活者の実情について情報源の内で、特に多かったものが、①「新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどで見聞きする」、⑥「家族や身近な人から話を聞く」、⑧「町内会などの話し合いで

聞く」である。ここで注目すべきは、「当事者」である野宿生活者自身やそのごく近辺にいる人（「ボランティアなど野宿者と関わる仕事をしている人や、野宿者と日頃から親しくしている人」）から情報を得ている回答者がきわめて少ないと言うことである。前者については、「よくある」「時々ある」をあわせても7.8％にすぎず、後者についても12.1％にとどまっている。このことは、おそらく市民の大多数が野宿生活者との直接の関係を持ちえていないことの表れであろう。しかし、いわば「当事者」抜きの情報に基づいて市民が「野宿生活者の問題」をとらえているとすれば、このこと自体が一つの問題ではないだろうか。

それでは次に、市民が野宿生活者について抱くイメージとその情報源との関係を見ることにする。ここでは、野宿生活者の実情に関する情報の入手経路の内で、特に接触の頻度が高かった①「新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどで見聞きする」、⑥「家族や身近な人から話を聞く」⑧「町内会などの話し合いで聞く」という三つの項目を分析の対象にした。その際、煩雑さをさけるために、「よくある」「時々ある」という回答をその情報源への「接触あり」とみなし、それ以外は「接触なし」として分析した。

（表13）は、三つの主要な情報源である「新聞・雑誌・テレビ・ラジオなど」のマス・メディア、「町内会」、「家族や身近な人」への接触度と市民による野宿生活者に関する21個のイメージ項目との相関関係を示したものである。なお結果の表示に際して、理解を容易にするために、イメージ項目の順序を適宜並べ替えてある。さらに（表13）において（＋）は有意な正の相関を示し、（＋＋）は特に強く有意な正の相関を示すものである。また、（－）は有意な負の相関を示し、（－－）は特に強く有意な負の相関を示すものである。

（表13）　情報源とイメージの相関

	町内会	家族など	マスコミ
汚い	－－	－	－－
不健康	－－		
みじめ	－－		
孤独			＋＋
かわいそう			＋
人がいい			＋＋
苦労してきた		＋	＋＋
しんどそう	－－		
うっとおしい	＋		
じゃま		＋	
乱暴	＋	＋＋	
酔っぱらい	＋＋	＋＋	＋
こわい	－		
怠け者			
無気力			
変わり者		＋	
すねている	＋＋	＋＋	＋＋
気楽	＋	＋	
自由			
楽しそう			
影がうすい		＋	

上の表からわかるように、市民が野宿生活者について抱くイメージとその情報源との間には明らかに一定の関係がうかがえる。

まず、マス・メディア（「新聞・雑誌・テレビ・ラジオなど」）を情報源としている回答者においては、「孤独」「かわいそう」「影がうすい」「苦労してきた」などの「同情すべき困窮者」という野宿生活者イメージを喚起するような項目と正の相関がみられる。また、「酔っぱらい」「すねている」という項目とも正の相関が見られたが、概して、「否定的な野宿生活者」イメージを喚起するような項目との相関は強くはない。

次に、「町内会」を情報源とする場合、「うっとおしい」「乱暴」「酔っぱらい」「怠け者」などの「否定的な野宿生活者」イメージを喚起するような項目との間に正の相関がみられた。また、

この場合、「同情すべき困窮者」イメージ項目については、「不健康」「みじめ」「しんどそう」などと負の相関が見られる。つまり、町内会を主たる情報源とする回答者とマス・メディアを主たる情報源とする回答者では、彼らが抱く野宿生活者のイメージが対照的であり、このことからおそらくは、これら二つの経路を流れている野宿生活者に関する情報がかなり異なっているのではないかと推測される。

さらに、家族や身近な人を主たる情報源にしている回答者の場合、「同情すべき困窮者」イメージを喚起する「苦労してきた」という項目と正の相関が見られた。また、「否定的な野宿生活者」イメージを喚起する「じゃま」「乱暴」「酔っぱらい」「変わり者」という項目と正の相関が見られた。このように、「家族や身近な人」を主たる情報源にする回答者の場合は、町内会を主たる情報源とする回答者の場合と共通する傾向がうかがえる。

以上のように、野宿生活者に関する情報源と野宿生活者についてのイメージの関係には、きわめて重要と思われる傾向が見られた。すなわち、マス・コミュニケーションを通じて野宿生活者の情報を得た場合には、そうでない場合にくらべ、野宿生活者を「同情すべき困窮者」としてイメージする傾向にある。なお、このような傾向は、この調査とほぼ同時期に、大阪市内において廃品回収業により生計をたてつつ野宿生活を送っていた男性が道頓堀川に投げ込まれ殺害されるという事件が起こったり、東京都が新宿駅構内で生活している野宿生活者を退去させたことなどが、連日マス・メディアによって報道されたという事情にも少なからず影響されているのかもしれない。

これに対して、野宿生活者の情報を「町内会」もしくは「家族や身近な人」を通じて得た場合には、野宿生活者を否定的な存在としてイメージする傾向が強いようである。このことから、調査対象となった地域が大阪市内でも特に野宿生活者を見かける機会が多い地域（中央区、浪速区、天王寺区、西区）であったことをも勘案すれば、それらの地域では日常的に町内会や家族の間で野宿生活者に関わる事柄が語られ、また問題とされていると考えられるが、そうした「情報交換」の場において、かなり厳しい「野宿生活者イメージ」が流通していると予想されるのである。いわばパーソナル・コミュニケーションの一形態とも言うべき、こうした情報回路において、「密やかに」交換される野宿者イメージの果たす作用は決して小さくはないと思われる。このことは、市民に対する「野宿生活者に関する啓発」を試みる際に考慮されるべきであろう。

Ⅲ 市民の考える問題解決

1．全体の概観

今回の調査では、「野宿しているお年寄りや労働者の問題を解決するにはどのようなことが重要だと思いますか」とたずねて、8項目の「解決方法」を提示し、それぞれについて賛否を聞いている。調査表に提示した8項目の選択肢は以下の通りである(なお括弧のなかはそれぞれの解決策に付与したラベルである。以後、質問文のかわりに、このラベルでそれらの解決策を参照する）。

1.行政は野宿者に対して生活保護などの福祉援助をするべきだ(福祉援助)
2.行政は野宿者を保護する施設を作るべきだ(保護施設)
3.行政は野宿者に対して仕事の斡旋をするべきだ(仕事の斡旋)
4.行政は野宿者問題を人権問題として市民に呼びかけるべきだ(啓発活動)
5.市民のボランティアによる野宿者支援を押し進めるべきだ(ボランティア)
6.警察は野宿者をきちんと取り締まるべきだ(取り締まり)
7.私たち自身が野宿者の人権について考えていくべきだ(自己啓発)
8.とりたてて特別な対策をとる必要はない(対策不要)

次の（表1）はその単純集計結果である。

(表1)

	賛成	反対	どちらともいえない	無回答
福祉援助	537 0.25	264 0.12	1279 0.59	106 0.05
保護施設	933 0.43	151 0.07	993 0.45	109 0.50
仕事の斡旋	1369 0.63	56 0.03	693 0.32	68 0.03
啓発活動	717 0.33	193 0.09	1197 0.55	79 0.04
ボランティア	527 0.24	228 0.10	1346 0.62	85 0.04
取り締まり	765 0.35	226 0.10	1104 0.51	91 0.04
自己啓発	788 0.36	136 0.06	1171 0.54	91 0.04
対策不要	216 0.10	875 0.40	990 0.45	105 0.05

この単純集計結果から、ただちに以下の2点が明らかになる。

①回答者（市民）による「問題」認知のあいまいさ

すべての「解決策」について、「どちらともいえない」という回答の比率がかなり高くなっている。８項目中５項目について「どちらともいえない」という回答の比率が５０％を越えている。このことは、回答者のかなり多くの部分が、「野宿者問題の解決」について（ということは同時に問題の問題性そのものについて）、さほど明確な像や切実な問題意識を持っていないのではないかということを示唆している。確かに、野宿者との具体的な接触がきわめて乏しい大部分の都市住民にとって、野宿者の「問題」がリアルかつ切実に実感されることはないのかもしれない。それはせいぜいのところ、「いやな気持ち」といった「不快感」のレベルで受け止められているのが実態ではないかとも考えられる。すなわち、野宿者の存在が、自分たちの直接的な生活利害に関わる問題としては経験されず、かといって、現在の私たちの社会の仕組みや構造に関わる社会的な問題として認識されているのでもない。ただ、漠然とした不快感と不安の縁どりをともなって見過ごされ、あるいは無視されているのではないかとも想像される。

②回答者（市民）による「対応の必要性」の認知

「対策不要」を別とすれば、どの対応策についても明確な「反対」という意見は少数である。「どちらともいえない」という回答率の高さに示されている、市民の問題認知の不鮮明さにも関わらず、多くの市民は同時に、そこに問題が存在し、そしてそれに対して「何らかの」対応がなされるべきだとは感じているようである。「解決」の具体的な方法や方向性については曖昧ではあっても、「問題」の存在そのものはかなりはっきりと認識されていて、そのことが提示された「解決策」に対して「反対」することをためらわせているのではないか。このことは「対策不要」に対しては「反対」という意見がかなり多い（４０％）という事実のうちにも示されている。

以上の２点を踏まえた上で、次に、回答者（市民）が「野宿者問題」に対して、どのような解決の「方向」を志向しているのかという点を、データに即して検討しよう。

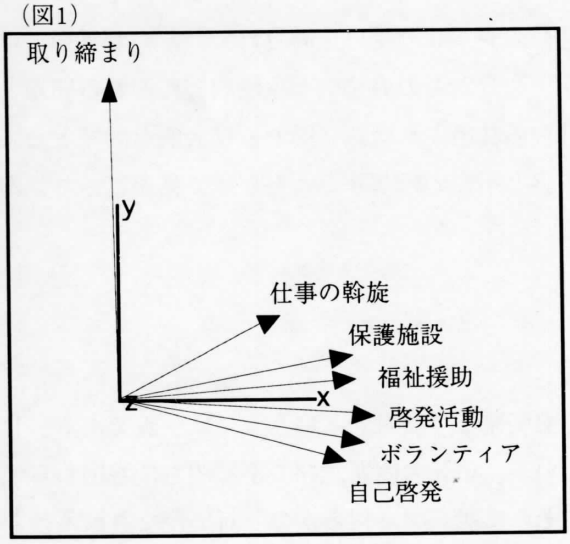
２．市民の志向する「問題解決」の基本的な方向性

ここでは、「野宿者問題」の解決策あるいは対応方法についてたずねた質問に対する、市民の回答に基づいて、市民の志向する「問題解決」の基本的な方向性を明らかにする。次の（図１）と（表２）は、「対策不要」という選択肢に「賛成」と回答した216人と、８個の質問のいずれか一つ以上に無回答であった回答者を除外した1785人について、「対策不要」以外の７項目の解決策（福祉援助、保護施設、仕事の斡旋、啓発活動、ボランティア、取り締まり、自己啓発）に対する回答を入力データとして「主成分分析」を行った結果を表示したものである（その際に、分析を単純化するために各項目の選択肢の「賛成」「反対」「どちらともいえない」という３カテゴリーを「賛成」と「非賛成」の２カテゴリーに変換して入力データとした）。

分析の結果、固有値１以上の主成分が２個抽出され、その累積寄与率は53％であった。２個の主成分に対応する各「解決策」項目の主成分負荷量を２次元座標上にプロットしたものが（図１）である。第１主成分（ｘ軸方向）への各項目の負荷量は大きい順に「啓発活動 → 福祉援助 → 保護施設 → ボランティア → 自己啓発 → 仕事の斡旋」となっており、ここからこの主成分は回答者（市

民）の「野宿生活者への支援活動」への志向を表していると解釈することができる。それに対して第２主成分（ｙ軸方向）は、「取り締まり」の負荷量が際だって大きく（0.93）、続いて、「仕事の斡旋（0.25）」→「保護施設（0.13）」なっている。それ以外の項目の負荷量は無視できるほどに小さいかあるいは負の値を示しており、ここから、この主成分は回答者（市民）の野宿生活者に対する「取り締まり」あるいは「排除」への志向を表していると解釈できる。

（図1）



（表２）

固有値	2.69	1.02
寄与率	38.47	14.62
累積寄与率	38.47	53.08
主成分負荷量		
福祉援助	0.42	0.06
保護施設	0.42	0.13
仕事の斡旋	0.29	0.25
啓発活動	0.46	-0.04
ボランティア	0.44	-0.12
取り締まり	-0.01	0.93
自己啓発	0.40	-0.18

このように、市民の志向する「野宿者問題解決」の方向は大きく「野宿者支援」と「取り締まり」という２方向に向かっていると考えることができる。ただし、ここで注意しなければならないのは、この２つの方向が決して相互に排反的なものではない、あるいは逆向きのベクトルではない、ということである。（図１）からもわかるように、この２つの「問題解決」の方向はむしろ直交しているのであり、このことは市民にとって問題解決の方法として「野宿者支援」を選択することと「取り締まり」を選択することとは相互に「独立」である（あるいは相互に「無関係」である）ということを意味している。すなわち、この２つの方向は市民の「野宿者問題の解決」への志向においては「両立」可能なのである。次の（表３）は、「野宿者支援」に賛成か否かということを示す変数（この変数では 啓発活動 、 福祉援助 、 保護施設 、 ボランティア 、 自己啓発 、 仕事の斡旋という５つの選択肢の１つ以上に賛成と答えた回答者を「野宿者支援」への賛成者とみなしている）と「取り締まり」に賛成か否かということを示す変数をクロス集計した結果を示したものであるが、これをみると「野宿者支援」に賛成の回答者もそうでない回答者もともに、そのうちの36％が「取り締まり」にも賛成しており、同様に「取り締まり」に賛成の回答者もそうでない回答者もともに、そのうちの81％が「野宿者支援」にも賛成しているのである。

（表３）

度数 行％ 列％	「野宿者支援」に賛成しない	「野宿者支援」に賛成する	合計
「野宿者支援」に賛成しない	240 63.66 19.02	137 36.34 18.92	377
「野宿者支援」に賛成する	1022 63.52 80.98	587 36.48 81.08	1609
合計	1267	724	1986

「野宿者支援」と「取り締まり」に対する賛成者の数は、それぞれの単純集計では1609人と724人であるが、両方に賛成している回答者が587人（全体の約30%）もいるのであり、このことを考慮に入れてそれぞれの「解決」の方向を志向する回答者（市民）のボリュームを見積もるならば、「野宿者支援」のみに賛成している回答者は全体の51.5%、「取り締まり」のみを志向する回答者は6.9%、両方に賛成する回答者は29.6%となる。2つの「解決」方向のどちらにも賛成しない回答者（すなわち両方に対して「反対」もしくは「どちらともいえない」と答えた回答者）も240人（全体の12.1%）存在する。このように見てくるならば、問題解決の方法として純粋に警察による「取り締まり」を志向している市民の割合はきわめて小さいということができるであろう。それに対して問題解決の方法として何らかの「野宿生活者に対する支援」を志向している市民の割合は過半数を超えており、この意味では、市民の志向に即した問題解決の基本的な方向は「野宿者支援」であると言えるだろう。ただし、市民の「取り締まり」への志向も無視できない程度に存在するという事実も忘れられてはならない。こうした要求あるいは要望が市民の野宿生活者に対するどのようなイメージや意識に基づいているのか、あるいは市民と野宿生活者との間のいかなる軋轢やトラブルがこうした「強権的」「排除的」な「問題解決」方法への志向を生み出しているのか、こうした点がさらに詳しく検討される必要があるだろう。

3．「野宿者支援」と「原因」の認識

問題の解決のためにどのような方策を志向するかということは、その問題の「原因」の認識のありように大きく規定される。たとえば、野宿を野宿者自身の意志や希望でなされたものとみなしている人は、おそらくその野宿を「社会的な問題」であるとは考えないであろうし、それゆえまたその野宿者を「支援」するために社会的な資源が使われることには賛成しないであろう。すなわち、「野宿者への支援」を志向する市民の間には、野宿生活者の存在を一つの「社会的な問題」として、それゆえ何らかの社会的な対処が必要な問題であるとする認識が共有されていると考えられる。ここでは、このことをデータから探ってみよう。

先の主成分分析の結果として、2つの主成分（「野宿者支援」と「取り締まり」）に対応した各回答者の主成分スコアが算出される。このスコアは、それぞれの主成分が示している「傾向」を各回答者がどの程度の強度で保持しているかを示す数値である。スコアが高ければ、その回答者は、対応する主成分が指示している傾向を強く示していることを意味しているし、スコアが低ければ逆にその傾向を示していないということを表している。ここでは、「野宿者支援」と名付けた主成分に対応する主成分スコアを「野宿者支援スコア」と名付けて、このスコアの高低と野宿の「原因」についての回答者の認知との間の関係を探ることとする。

今回の調査では市民の「野宿の原因」に対する認識のありようを調べるために、二つの質問を用意した。ひとつは、市民が野宿の「直接的な原因」をどのようなものであると考えているか、ということを調べるために用意されたもので、具体的には次の質問文が提示された。

問7　野宿者は何が原因で野宿をしていると思いますか。あてはまると思うものすべてに○をつけてください。

a．不景気で仕事がないから　　b．本人が望んだから
c．商売や事業に失敗したから　　d．病気やけがのため
e．働くのがいやだから　　f．身よりがないから
g．高齢で働けなくなったから
h．自分とはまったく関係がないから想像もつかない

もう一つの質問は、野宿の「社会的な」あるいは「構造的な」原因をたずねたもので、以下のような質問文が提示された。

問１２　どこに問題があって、野宿している人は路上で寝なければいけないと思いますか。

a．本人　　b．本人の家族
c．行政　　d．企業の考え方
e．野宿している人たちに対しての私たちの見方・関わり方

この２つの質問に対する回答と、「野宿者支援スコア」との間の関係を見るために作成したものが次の（表４）と（表５）である。各セルの中の数値は該当する回答グループの野宿者支援スコアの平均値である。

（表4）
問7　野宿者はなにが原因で野宿をしていると思いますか

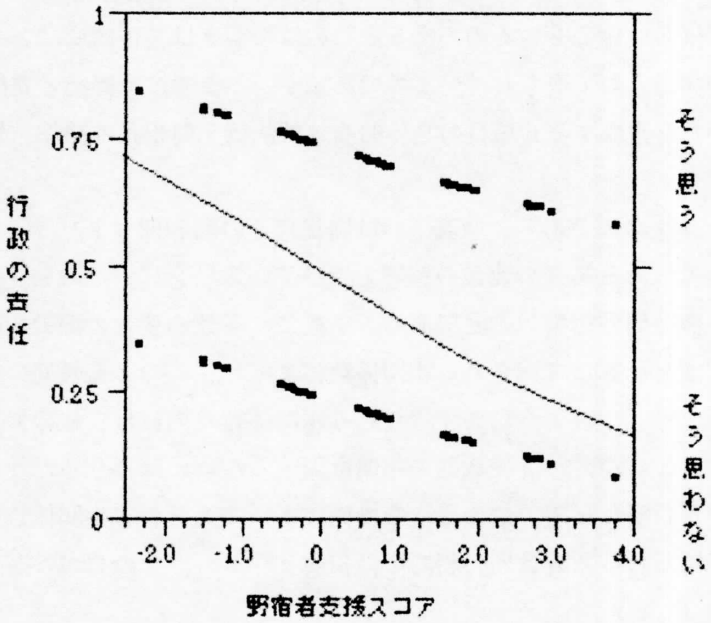
	そう思う	そう思わない	F値	Prob›
a.不景気で仕事がないから	0.314	-0.384	59.9	‹.0001
b.本人が望んだから	-0.316	0.305	49.5	‹.0001
c.商売や事業に失敗したから	0.421	-0.215	45.1	‹.0001
d.病気やけがのため	0.797	-0.143	57.9	‹.0001
e.働くのがいやだから	-0.223	0.336	37.1	‹.0001
f.身よりがないから	0.327	-0.230	37.1	‹.0001
g.高齢で働けなくなったから	0.518	-0.242	63.1	‹.0001
h.自分とはまったく関係がないから想像もつかない	-0.661	0.070	21.2	‹.0001

(表５)
問12　どこに問題があって、野宿している人は路上で寝なければいけないと思いますか

	そう思う	そう思わない	F値	Prob›
a.本人	-0.16	1.151	92.1	‹.0001
b.本人の家族	0.099	-0.082	1.4	‹.0001
c.行政	0.656	-0.652	231.5	‹.0001
d.企業の考え方	0.909	-0.065	23.8	‹.0001
e.野宿している人たちに対しての私たちの見方・関わり方	0.949	0.161	76.6	‹.0001

上の２つの表から、回答者（市民）の野宿者問題解決の方法としての「野宿生活者支援」への志向（これは「野宿支援スコア」の大きさによって測ることができる）と「野宿の原因」の認識とのあいだにはきわめて密接な関係があることがわかる。野宿の「直接的な」原因について見れば、その原因を、不景気による仕事の減少や、商売・事業の失敗、病気やけが、高齢といった、野宿生活者本人の責任に帰することのできない事情によると考えている回答者においては、そうでない回答者と比べると、その「野宿者支援スコア」の平均値が、統計的に有意に高くなっている。野宿の「社会的な」原因についても同様のことが言える。すなわち、野宿の原因として行政や企業のありかた、あるいは「野宿している人たちに対しての私たちの見方・関わり方」などに原因があると考えている回答者のスコアの平均値は顕著に高くなっているのである。とりわけ、平均値の差の大きさの指標であるＦ値に注目すれば、野宿の因として「行政」をあげている回答者とそうでない回答者との間のスコアの平均値の差はきわめて大きく（Ｆ値は231.5）、ここから判断すれば、「野宿者支援スコア」の大きい回答者は「行政」のありかたを野宿の最も大きな原因の一つと考えていると推測される。次の（図２）は「野宿者支援スコア」の上昇につれて「行政の責任」を認める回答者の割合がどのように変化するかを見たものであるが、これを見ると「野宿者支援スコア」と「行政の責任」の承認との間にきわめて大きな相関のあることがわかるであろう。

（図２）



このように見てくるならば、多くの回答者（市民）が問題解決の方向として「野宿者支援」を選好しているという事実の背後には、「野宿者問題」を野宿生活者自身の「個人的な問題」としてではなく、一つの「社会的な問題」として、それゆえ何らかの「社会的な対応」が要求されている問題として認識しようとしている回答者（市民）が多いという、もう一つの事実が存在しているということがわかる。確かに、先の回答者の抱く「野宿者イメージ」の分析の箇所で指摘したように、一方では回答者（市民）の多くが、野宿生活者に対して、経験的な事実に裏打ちされない否定的なイメージ（偏見）を抱いており、このことが回答者（市民）の問題認識のありようを不鮮明なものにし（その一つのあらわれが「解決策」に対する「どちらともいえない」という反応の多さではないだろうか）、また歪ませているとも予想されるのだが、しかし同時に、問題の持つ「社会性」もまた、とりわけ「野宿者支援」を志向する回答者において、一定程度は認識されていると考えられる。

4．「野宿者支援」の詳細について

以上のように、市民の「野宿者問題の解決」へ向けての基本的な志向は「野宿者支援」であることが明らかになったが、ここではさらに、この「野宿者支援」という方向性のより立ち入った検討を行う。ここで「野宿者支援」と呼んでいる問題解決の方向性は、先にも述べたように、具体的には「啓発活動」、「福祉援助」、「保護施設」、「ボランティア」、「自己啓発」、「仕事の斡旋」という6つの解決策に対する回答者の「賛意」のいわば合成ベクトルとして構成されている。（図1）からもわかるように、これら6つの解決策に対する回答者の賛意はおおまかには同一の方向を指し示してはいるが（そしてこの方向を「野宿者支援」と名付けたのである）、詳細に見れば、それぞれの具体的な解決策が指し示している方向はかなり異なっているとも言える。すなわち、各項目は大きくは「野宿者支援」と名付けた方向を示してはいるが、同時に「自己啓発」と「仕事の斡旋」を両極とする広がりの中にばらついてもいるのである。このばらつきは具体的には2つの主成分への各項目の主成分負荷量の相違として表されているのであるが、ここでは「野宿者支援」として総括した問題解決の中味を、それを構成する6項目の具体的な「解決策」間相互の関係を分析することを通じて明らかにしていこう。

次の（表6）は6項目間の相関マトリックスであり、（表7）は同様にその偏相関マトリックスである（偏相関とは、二つの変数がともにある第3の変数の影響を受けている場合に、この第3の変数の影響を取り除いて得られる、2変数間の相関のことである。一般に、多数の変数の間の相関を調べたい場合、単純に2変数間の相関を計算して得られる相関係数によって、この2変数間の相関の強さを測ることはできない。なぜなら、このようにして得られる相関係数の内には、他の変数の「影響」が含まれているからである。それゆえ、2変数間の相関を調べるためにはこうした「他の変数の影響」を取り除くという操作が必要となる。このような操作によって得られる相関係数を偏相関係数と呼び、この係数によって測られる2変数間の相関を偏相関と呼ぶ）。この2つの表か

（表6）「問題解決方法」の相関マトリックス

Variable	福祉援助	保護施設	仕事の斡旋	啓発活動	ボランティア	自己啓発
福祉援助	1.00	0.54	0.21	0.38	0.37	0.28
保護施設	0.54	1.00	0.27	0.35	0.35	0.29
仕事の斡旋	0.21	0.27	1.00	0.28	0.22	0.21
啓発活動	0.38	0.35	0.28	1.00	0.48	0.47
ボランティア	0.37	0.35	0.22	0.48	1.00	0.40
自己啓発	0.28	0.29	0.21	0.47	0.40	1.00

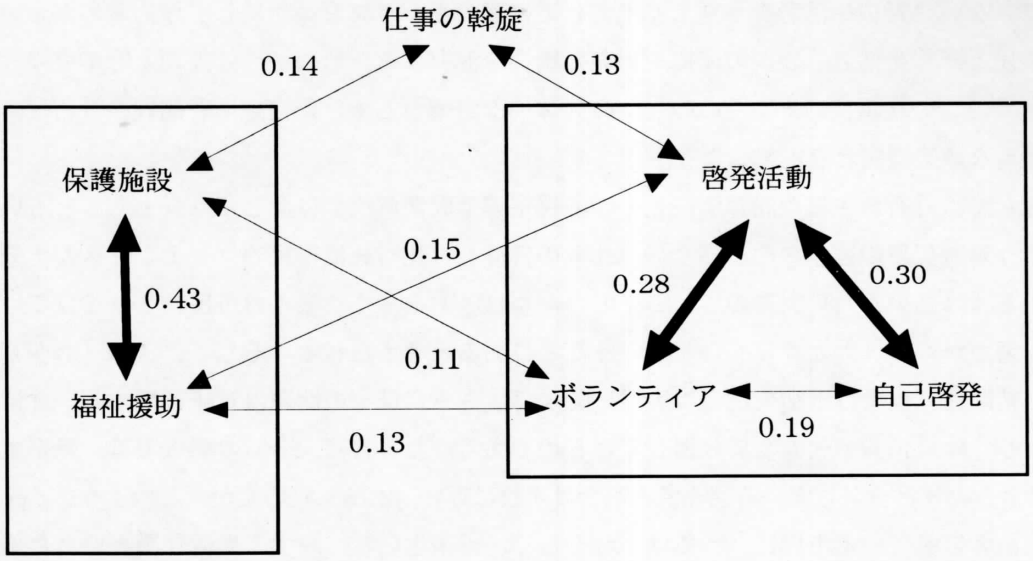
（表7）「問題解決方法」の偏相関マトリックス

Variable	福祉援助	保護施設	仕事の斡旋	啓発活動	ボランティア	自己啓発
福祉援助	・	0.43	0.03	0.15	0.13	0.04
保護施設	0.43	・	0.14	0.07	0.11	0.07
仕事の斡旋	0.03	0.14	・		0.04	0.06
啓発活動	0.15	0.07	0.13	・	0.28	0.30
ボランティア	0.13	0.11	0.04	0.28	・	0.19
自己啓発	0.04	0.07	0.06	0.30	0.19	・

ら6個の「解決策」間には相互にかなり高い相関があることがわかる。特に「福祉援助」と「保護施設」との相関は大きく、さらに「啓発活動」と「ボランティア」と「自己啓発」の3者間の相関も大きい。それに対して、「仕事の斡旋」は他の項目との際だって大きい相関はうかがえない。こ

のような6項目間の相関関係を見やすくするために（表7）の偏相関マトリックスから作成された概略図が（図3）である（この図では項目間の相関係数が0.1未満のものは省略されている）。

（図3）



これらの（偏）相関マトリックスや概略図からもわかるように、6個の「解決策」はさらに、①「仕事の斡旋」、②「保護施設、福祉援助」③「啓発活動、ボランティア、自己啓発」という3個の下位グループに細分類することができるであろう（そして、この3分類は各項目の主成分負荷量をプロットした先の（図1）からもある程度はうかがうことができる）。そして、この「野宿者支援」の下位3類型が、回答者（市民）が志向する「野宿者支援」の具体的な3つの型であると考えることができる。この3類型のうちの第2類型（「保護施設、福祉援助」）は、問題解決の実行を主として公権力の行使や行政の施策によって進めようとする方向である。これを「行政主導型問題解決」と名付けよう。それに対して、第3類型（「啓発活動、ボランティア、自己啓発」）は市民自身による、あるいは市民と野宿生活者の「共生」に依拠した、問題解決への志向と言うことができるであろう。これを「市民主導型問題解決」と名付ける。この3類型に対して賛成と答えた回答者の数はそれぞれ以下の通りである（表8）。

それぞれの解決策を選好している回答者の数から言えば、「仕事の斡旋」が最も多く、またこの解決方法に対する積極的な反対者（質問に「反対」と答えた回答者）の比率は8項目中最も低い（2.6%）。その意味ではこれが回答者（市民）の志向する問題解決の最大公約数的なありかたを示していると言うこともできるであろう。さらには、今回の市民意識調査と並行して行われた、236人の野宿生活者に対する聞き取り調査においても、彼らの要望の中で最も多かったのが「仕事が欲しい」というそれであったということが明らかにされており、この点と併せて考えるならば、この野宿生活者への「仕事の斡旋」という解決方法は、問題解決をめぐる社会的な摩擦や利害の衝突の最も少ない「最適解」と考えることができる。

（表8）

類型	人数	比率
①仕事の斡旋	1182	0.66
②行政主導型問題解決	873	0.49
③市民主導型問題解決	940	0.52

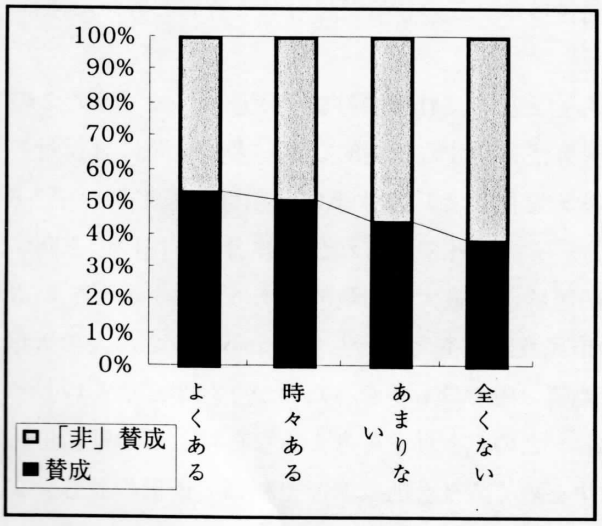
しかし、この市民の考える「最適解」は野宿生活者をとりまく現実（たとえば、今日の釜ヶ崎状況に表れているような「厳しい就労状況」といった現実）を組み込んでおらず、それゆえ、この「最

適解」を実現することがきわめて困難であるということにも注意する必要がある。市民の考える「最適解」は必ずしも状況適合的ではないのである。そしておそらくは、まさにこの点に、今日の野宿生活者問題の難しさがあるのである。そのため、この市民の考える解決策とそれを容易には実現することができない「野宿生活者をとりまく現実」との間のギャップをいかにして埋めるのかということが、市民と野宿生活者との間の摩擦や利害の衝突を回避するための一つの課題として登場してくる。そして、この課題に応えるための一つの具体的な方策として、野宿生活者問題の「市民への啓発」が重要な政策課題となってこよう。

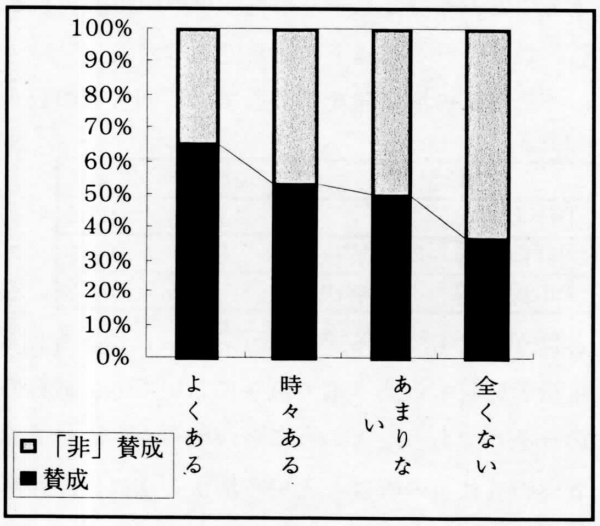
これに対して、「行政主導型問題解決」や「市民主導型問題解決」に関しては「どちらともいえない」という判断保留の回答の率が高く、「仕事の斡旋」に比べれば市民のコンセンサスが十分に得られているとは言いがたい。このことの原因の一つは、おそらく、多くの市民にとってはこうした「解決」策がかなり「わかりにくい」ということにあると考えられる。そして、この「わかりにくさ」は、結論的に言えば野宿生活者の実態に関する、さらにはその問題の意味に関する、「情報の不足」もしくは「情報の欠如」に起因しているのである。たとえば、今回の調査では、野宿生活者を「怠け者」とイメージしている回答者の割合は半数に近い（49.8%）のだが、このようなイメージで野宿生活者を見ている市民にとっては、おそらく、野宿生活者に対する生活保護といった施策はかなり「わかりにくい」ものであるだろう。しかし、もしも市民の間に、野宿生活者の多くが失業した日雇い労働者であり、また高齢や疾病・障害のために「働きたくても働けない」人々であるといった事実の認識が共有されているならば、その「わかりにくさ」は解消するはずである。

次の（図4）と（図5）は「行政主導型問題解決」および「市民主導型問題解決」への賛否と、「新聞・雑誌・テレビ・ラジオ」などのメディアを介してどの程度野宿生活者の実際について知ることがあるか、という質問に対する回答をクロス集計し、その結果を図示したものである。ちなみに、この二つの図において、X軸は「新聞・雑誌・テレビ・ラジオ」などのメディアを介して野宿生活者の実際について知る頻度（「よくある」「時々ある」「あまりない」「全くない」）の分類であり、Y軸は「行政主導型問題解決」および「市民主導型問題解決」への賛成者の比率である。

（図4）



（図5）



はたして、現在のマス・メディアが野宿生活者の実態や問題をどの程度正確に伝えているかという点に関してはかなり疑問はあるが、そうしたメディアを介した「情報」であっても、それらに接

触する頻度の高い回答者においては、「行政主導型問題解決」や「市民主導型問題解決」に賛成であると答える回答者の比率が高くなっているということが、この二つの図から読みとれるであろう。ここからも、「野宿生活者支援」のための施策の推進のためには、市民への十分な情報の提供と、それに基づくコンセンサスの形成が重要であることがわかる。

とりわけ、現段階では必ずしも十分なコンセンサスが得られているとは言いがたい野宿生活者問題の「行政主導型問題解決」や「市民主導型問題解決」を政策として実施していく場合には、この情報提供と市民のコンセンサスの形成という方策をあわせて実施していくことが必要である。もしも、こうした「市民への情報提供」が十分になされないままに、「行政主導型」の「解決」策がとられるならば、先の「どちらともいえない」と答えた市民は、容易に「野宿生活者支援」への反対者に転じる可能性は否定できないのである。それゆえ、「野宿生活者問題」に関して市民に十分な情報を提供し、さらには「啓発」を進めることが重要な政策課題となるのである。

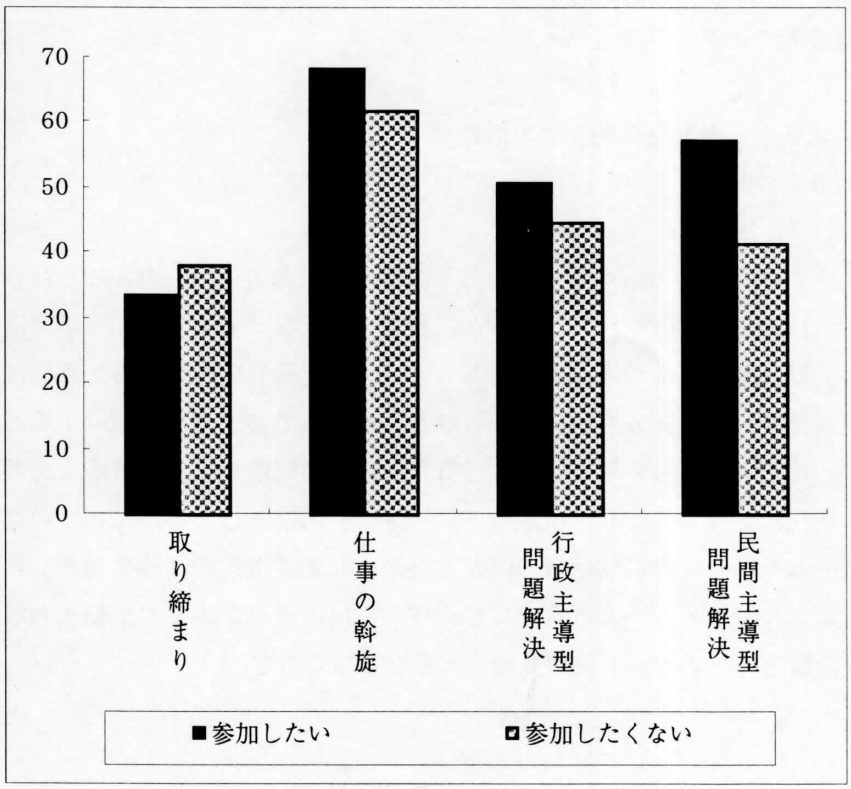
5．市民の「ボランティア活動」と「野宿者支援」

「市民主導」による野宿者問題解決への志向の根底には、市民の旺盛な「ボランティア活動」への参加の意欲があると考えられる。今回の調査では「あなたは、今後できるならボランティアなどの社会や人々に役立つ活動に参加したいと思われますか」という質問をしているが、その集計結果によれば、参加したいと答えた回答者は1490人で、比率では70.9%にもなる（表9）。こうした市民のあいだに存在する「ボランティア活動」への参加意欲と野宿生活者問題の「解決」への志向性との間の関係を見るために作成したのが（図6）である。このグラフは、「ボランティア活動に参加したいと思う」回答者とそうは思わない回答者別に、野宿生活者問題の「解決」策（「取り締まり」「仕事の斡旋」「行政主導型問題解決」「市民主導型問題解決」）への「賛成」者の比率を棒グラフで表したものであるが、これを見ると、ボランティア活動への参加意欲を持っている回答者は野宿生活者へ

（表9）

問18　あなたは、今後できるならボランティアなどの社会や人々に役立つ活動に参加したいと思われますか。		
a. 思う	1490人	70.9%
b. 思わない	612人	29.1%
合計	2102人	

（図6）



の「仕事の斡旋」や「行政主導型問題解決」、そしてとりわけ「市民主導型問題解決」に賛成する回答者の比率が高くなっていることがわかる。これに対して、ボランティア活動に参加したいとは「思わない」と回答したグループにおいては若干ではあるが野宿生活者への「取り締まり」に賛成する回答者の比率が高くなっている。このことから、市民のボランティア活動への参加意欲を、「野宿生活者支援」にむけてのコンセンサス形成および施策の推進のための「市民的基盤」としてとらえることができる、と言うことができるのではないだろうか。

もちろん、このボランティア活動への参加意欲がただちに市民の野宿生活者への「支援」に結びつくものではないということにも留意しておく必要がある。今回の調査では、ボランティア活動に参加したいと「思う」と答えた回答者1490人に対してさらに、ボランティア活動の具体的な4領域を提示して、それらの領域における活動に「参加したいと思う」かどうかをたずねている。その4領域とは以下の通りである。併せて、それぞれの領域での活動に「参加したい」と答えた回答者の比率を示しておく（ただし母数はボランティア活動に参加したいと答えた1490人である）。

①地域活動団体・ＰＴＡ・会社などが行っている、私たちの生活に関わる活動（公園の清掃、リサイクル活動など）
参加したいと答えた回答者の比率　　85.7％

②今の自分の生活には関わらないが、いつかは自分にもふりかかることがらへの支援活動（高齢者や天災による被災者への支援活動）
参加したいと答えた回答者の比率　　93.8％

③ほとんど自分に関わることはないが、同じ人として手をさしのべる活動（非行少年の社会復帰への支援、難民キャンプへの援助活動など）
参加したいと答えた回答者の比率　　70.3％

④野宿している人への炊き出しや医療援助などの活動
参加したいと答えた回答者の比率　　40.2％

上の集計結果において、「④野宿している人への炊き出しや医療援助などの活動」へ参加したいと答えた回答者の比率が、他の活動領域へのそれに比べると、顕著に低くなっているという事実は注目に値する。全体としては、回答者にとって「身近な」あるいは「切実な」領域への参加意欲は高く（たとえば高齢者への支援活動）、自分の生活領域から離れるに従って参加意欲も減退するという傾向がうかがえるのだが、そのように考えるならば、「野宿生活者の問題」は、社会的な諸問題への関心が高いと思われる市民にとってさえも、依然として「遠い」問題としてしか見えていないのではと推測される。ここでもやはり、野宿生活者の問題をいかにして「市民の共通の問題」とするのかということが課題となるのである。そのうえではじめて、市民のボランティア活動への参加意欲は「野宿生活者支援」の推進のための「市民的基盤」ともなるのである。